

「愛の賛歌」

2022年11月02日

たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、私は騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ私が、預言する力を持ち、あらゆる秘儀とあらゆる知識に通じていても、また、山を移すほどの信仰を持っていても、愛がなければ、無に等しい。また、全財産を人に分け与えても、焼かれるためにわが身を引き渡しても、愛がなければ、私には何の益もない。愛は忍耐強い。愛は情け深い。妬まない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、怒らず、悪をたくらまない。不正を喜ばず、真理を共に喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。(Iコリント13:1~7)

それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残ります。その中で最も大いなるものは、愛です。(Iコリント13:13)

パウロは、「そこで、私は、最も優れた道をあなたがたに示しましょう」と書き始め、Iコリント13章で、「愛の賛歌」と言われる有名な愛についての章を綴っている。どれほど多くの人々が、この「愛の賛歌」に励まされ、慰められ、生きる勇気を与えられてきたことだろうか。私もその一人である。パウロは、どんなに素晴らしく、力強く、また、どんなに大きな犠牲を払う行いをして、愛がなければ、無に等しく、何の益もないと言う。

異言は、聖霊を受けて、人には聞き分けられず、本人のみが分かる言葉で神を賛美することで、初代教会においては、よく見られた証しであった。パウロは、人間が語る異言、天使たちが語る異言さえも、愛がなければ、ただ騒がしいどら、やかましいシンバルに過ぎないと言う。

福音の真実を知り、あらゆる秘儀と知識に通じ、これを宣教することができても、また、ラビ(教師)がとてつもない偉大な行為をした時、弟子たちは「ラビ、あなたは山を動かしました」と言って賛美したが、そのような山を移すほどの信仰があっても、愛がなければ、無に等しい。「無に等しい」という言葉は、ギリシア語を直訳すると「私は無である」、その内実は「私は存在しない」という意味である。パウロは、どんなに素晴らしい信仰を持って、それを宣教したとしても、愛がなければ、「私は存在しない」と言う。人間が人間として存在するのは愛を持つ時である。私たちは愛を失い、いかに非存在を生きていたかを思われる。

イスラエル人にとって、貧しい人への施しは最高の善行であったが、全財産を人々に分け与えても、また、初代教会においては背教を迫られ、殉教することがしばしばあったが、迫害を受け、身を焼かれるような苦難を負うとも、愛がなければ、何の益もない。どんな犠牲を払おうとも、そこに、愛がなければ、何の益ももたらさない。パウロは、どんな深い信仰、善行、殉教などの崇高な行為よりも、愛が最高の価値あるものであると信じた。それは、主イエスの愛に倣うことから導き出された福音であった。

パウロは次に、愛が何であるかを、「愛」を主語にして書いている。始めに、愛の働きが肯定的に説かれている。まず、「愛は忍耐強い。愛は情け深い。」日本聖書協会訳は「愛は寛容であり、愛は情け深い」と訳していた。忍耐強く寛容であることは、短気の反対で気が長く、辛抱強いことである。怒りや咎めの気持ちを押さえ、耐える。これは、相手に対してやさしく振舞うことで、相手の痛みや悲しみを理解する情け深さである。

次に、愛に反する八つの思いを取り上げ、それらを否定することによって、愛が何であるかを語っている。「〈愛〉は妬まない。愛は自慢せず、高ぶらない。」人はしばしば妬み、自慢をし、他人を見下す。愛はその反対である。洗礼者ヨハネは「あの方は栄え、私は衰える」と言った。主イエスは神の子だから栄えを受けられるが、私はただの人間だから、衰えていく。このヨハネの言葉は、パウロの説く、高ぶらない「愛」である。

「〈愛〉は礼を失せず、自分の利益を求めず、怒らず、悪をたくらまない。」愛は他者に礼儀正しく対応する。だから、怒ることなく、悪に走ることもない。それが可能になるのは、自分の利益を求めないからである。自分の利益のみを得ようとする人は我欲が先行し、思い通りにいかないと他者への怒りが込み上げ、礼儀を失うのである。「〈愛〉は不正を喜ばず、真理を共に喜ぶ。」新共同訳は「不義を喜ばず、真理を喜ぶ」と訳している。愛に反するこれらの行為は不正、不義である。愛は、真理に基づいた正義を喜ぶ。今日、人との間で、また、社会の中で正義が著しく損なわれているが、パウロは、愛が正義を回復していくと語っている。最後に「〈愛〉はすべてを忍び、すべてを信じ、すべてに耐える」と言う。愛が忍び、耐えることであると考えようか。愛という言葉は、私たちを温かい心に誘うが、それは、愛されることを期待しているから、心地よく響くのである。パウロの説く愛は、愛される愛でなく、愛する愛である。愛する愛は、忍び、耐えるのである。それは、主イエスの生涯、殊に、受難週の姿から見ることができる。主イエスは愛を生きるため、どれほどの忍耐をしたであろうか。受難週に入って、人間の罪を赦す愛を貫徹するために、耐えがたい苦悩を忍び、耐えておられる。愛は、主イエスの十字架にその極限がある。私たちの小さな人生においても、本気で人を愛した時、我慢を強いられたことは、誰もが経験しているだろう。愛される愛から、愛する愛へ向かう時、忍び、耐えることを学ぶのである。パウロの勧める愛は、この愛する愛である。

パウロは、最後に「愛は決して滅びません」と、愛の永遠性について書いている。預言は廃れ、異言はやみ、知識も廃れていく。人間の知識は一部分であり、預言も一部分だからである。しかし、完全なものが来た時、即ち、キリストの再臨による終末が来た時には、部分的なものは皆、解消される。幼子だった時は、幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えてきた。大人になった時には、幼子のような在り方はやめた。幼子から大人の視点に転換するこの記述は、パウロの論敵の言葉や考えの未熟さを批判したのではないかと思われる。論敵に対し、大人の視点を持ちなさいと言っている訳である。そして、今は、鏡におぼろに映ったものを見ているように、一部分しか知らないが、終末時には、顔と顔とを合わせて見ることになる。その時には、私たちが神にはっきり知られているように、はっきりと知ることができる。当時の鏡ではおぼろにしか映らなかったのも、おぼろに一部分しか見ていないと書いているが、終末の時には、顔と顔とを直に見て、全てを、神をも知ることができる。神認識は間接的で、不完全であったが、直接的で、完全に認識することができるようになる。パウロは「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残ります。その中で最も大いなるものは、愛です」と語る。信仰は分からないから、信じるということが起こる。希望は、現在が満たされていないから、望むということが起こる。信仰、希望、愛は終末までのキリスト教実存の根幹であるが、愛は、信仰と希望が不必要になった終末後においても、永遠に神と人間の間で生き生きと交わる。愛は、最も大いなる、優れたもので、永遠に存続するものであるとパウロは教えている。